



USC卒業生は語る

卒業後は日本に帰国し、台湾のIT企業にて6年以上勤務、現在はイギリスの精密機器メーカーにて働いています。

子どものころから色々な人と話しをするのが好きで、高校では、海外交流が多い国際コースに通い、1か月短期留学や東南アジアの人とのキャンプなどを経験、もっと色々な国の人と会ってみたいと北米留学を目指すことになりました。高校卒業後は、北米生活に慣れるのとコミュニティカレッジという2年制の大学入学に必要なTOEFLスコアをとるの目的に、まずカナダバンクーバーの語学学校に半年通いました。

最初から4年制大学に行かず2年制を選択したのは、アメリカの4年制大学の学費が高いのと、せっかくなら良質な専門分野の授業を受けるために良い大学に行きたいと考えたとき、英語レベルと成績を伸ばして3年次から4年制大学へ編入 (transfer) する道ならチャンスがあると知り、この道を選びました。

2年目の夏休み、編入先の大学を決めるのに西海岸だけではなく東海岸まで足を伸ばして、有名大学の多くをこの目で見て回りましたが、最終的には、自分が興味のある国際関係学とビジネスの両方を学べる大学、しかも多国籍な環境を提供しているUSC (全米No.1) で国際関係学を学べること、また私立なので少人数で受講ができることを魅力的に感じ、USCへの編入を決めました。

USCは同族意識が人一倍強い大学で、卒業生のネットワークもとても強く、

英語での発信力を磨き、日本の広報力を高めることに貢献したい

山田 真梨子 さん
(2007年人文科学部卒)



卒業すれば世界のどこへ行っても困らないとまで言われています。学費は高いですが、それに見合った面白いネットワークが得られます。私立大学である限り、どんなことをしても伝統を守り続けてくれるだろうとの期待もありました。

授業はとても大変で、特にリーディングの量が半端ではないのとそれを基にしたのクラスメイトとのディスカッションには苦勞しました。毎週大量の本や資料が渡され、この時は日本の高校で学ぶ文法や長文読解をしっかりとっておけばよかったと後悔しました。最近、日本の学校の英語教育では、「聞く」「話す」に注目が集まっているようですが、私の経験では、多読に耐える読解力・速読力・文法力は不可欠だと思います。その証拠に、日本でしっかり勉強してきた人は私に比べ、リーディングが得意なように感じました。ですから、これまでの日本の学校での英語教育が悪いとは一概には言えないと思います。

そして、授業とは別週3回TA主導のクラスメイトとのディスカッションをしなければいけなかったのですが、自分の質問力の乏しさに、受け身の授業に慣れているのだと日米の授業の違いを体感しました。ただ、自分では思いつかない意見や価値観には発見が多く、楽しさもありました。また、ビジネスの授業では、課題解決型のものが多く、多国籍の仲間たちと多様なアイデアを練りこんでプロジェクトを完成させるのも面白かったです。

USCの学部はアカデミックなものだけでなく、スポーツからアート、さらにはエンターテインメント系まで揃っていて、卒業

生にはハリウッドの著名人などいます。スポーツでは一時、オリンピックで獲得したメダル数が、日本より多いこともありました。また富裕層の子弟も多く、独特の雰囲気があるのも特徴の一つといえるかもしれません。

この留学生活で得たのは、そんな独特な世界で培った多様性への理解、そこで生き抜くための忍耐力で、今現在でも私の人生に大きく影響していると感じさせられます。

現在まで、外資系の企業に勤めており、海外の製品を日本で広めるために、日本と海外の人たちのコミュニケーションを繋ぐという役目が多く、やりがいを感じてきました。

今後は、元々、日本のよさを海外の人たちに伝える仕事があったこともあり、英語での表現力をよりブラッシュアップさせて、日本から海外に発信する業務に興味をもっています。

そのためには、英語はもちろんですが、ベースとなる日本語力が重要なことは言うまでもありません。日本語という言葉は表現が豊かで、例えば「しとしと」「ぼつぼつ」などの擬態語も、直訳ではその繊細さは理解してもらえません。やはり相手の文化的な背景まで理解したうえで、どう伝えればいいのかを突き詰める必要がありますし、それが発信力を高めることにつながるのではないかと考えています。

社会人になって10年以上たっても、いまだにやりたいことが尽きないのは、とても幸せなことです。そのルーツは留学をして得たところにありますから、USCに身を置けたことに非常に感謝しています。

USCで日本語と国際関係を学び、今は日本の大学の国際広報に貢献

東京大学本部広報課 特任専門職員
ウィットニー・マッシュューズ
Whitney Matthews さん
(2008年人文科学部卒)



USCに入学すると、「あなたは今日からトロージャンファミリーの一員です」と歓迎されるように、USCはファミリーであることをとても大切にしています。卒業生の集まりなどに行っても、知らない人でもすぐ親しくなれるのもそのため。当然、仕事を紹介しあうことも多くなるし、生涯のネットワークにもなります。

私は小さい頃から日本語に興味があり、大学進学に際しては、充実した日本語学習プログラムが多く、自然な日本語に触れられる機会も多いだろうと、西海岸を目指しました。南部のジョージア州出身ということもあったので、大学に入るのを契機にそれまでと違う環境・文化・人に出会いたかったのです。

USCに入ってから本格的に日本語を学び、3年次には1年間、交換留学で早稲田大学国際教養学部で学びました。卒業後は再び日本へ。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 (GSAPS) で修士を取り、そのまま日本で就職し現在に至っています。

アメリカの大学の学費は日本の大学と比べて高い方ですが、奨学金は充実しています。自分のコミュニティの中でリーダーシップを示した人や、特殊な事情のある人に向けたものから、家族の中で最初に入学生の人や、同じ大学の卒業生がいる人を対象にした奨学金まで、様々なものが大学や民間企業・組織によって用意されています。留学生向けの奨学金もあります。

私は4年間、民間企業の提供する給付型奨学金を利用し、4年次にはワークスタディ制度も利用しました。学生が、大学の受付などの事務やチューターなど、用意された仕事をこなすことで大学から助成を受けるというものです。ただ、学費を全額賄

うには程遠く、残りは学生ローンで払いました。もっとも、USCをはじめ多くの大学の卒業生には、社会人になってからかなりの年数、学生ローンを払い続けている人が少なくありません。中には定年まで払うという人もいます。

大学の勉強は、やはり名門ですのでも厳しいものでした。また高校も私立の進学校で、必修科目は多く、しかも広範囲にわたっていました。たとえば物理学や微積分の授業から英文学や政治組織の授業まで、卒業するために受けなければいけない授業は様々でした。一方、大学のように選択科目もあり、私は鳥類学やジャーナリズムの授業も受けることができました。

授業以外では、高校のバレーボールチームに属したり、ボランティア活動などをしたり、SATやACTの受験勉強もしたりして、充実した高校生活を送りました。かなり忙しい時期もありましたが、USCでも、様々な分野にわたる必修科目がありましたから、大学に入る準備としてはとても大事な経験でした。

私は日本語との出会いから日本も日本人も大好きになり、今その日本で暮らしていますが、よく言われることですが、日本の文化ではコンセンサスが重んじられ、和を保つために自分の意見を言わないことが多い。これは場合によってはとても良いことですが、もう少し自分の意見を気軽に言えるようになればよいと思います。また、このこととどこかで通じるかもしれませんが、学生も社会人もリスクを取りたがらない傾向があるのが気になります。たまにはリスクを——たとえそれが計算されたものであれ——取る方が、ビジネスにも人生にもメリットがあると思いますから、もっといろんな場面でチャレンジ精神を發揮してほしいと思います。

博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2017

『はかせだものみんなちがってみんないい～自分のキャリアを開くための「意思決定」のヒント～』が開催

10月19日から21日まで、名古屋にて博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2017^{注1}が開催された。そのなかで、名古屋大学・PhDプロフェッショナル登龍門^{注2}の学生有志主催にて『はかせだものみんなちがってみんないい～自分のキャリアを開くための「意思決定」のヒント～』という企画が催された。同企画では、PhDプロフェッショナル登龍門を履修する近藤菜月氏をモデレーターとし、博士課程教育リーディングプログラム(LP)修了生4名:武居弘泰氏(大阪大学・超域イノベーションプログラム修了、現システムクス株式会社)、白石晃将氏(京都大学・思修館プログラム修了・現外務省)、乾敏恵氏(同志社大学・グローバルリソースマネジメントプログラム修了・現パナソニック株式会社)及び金光慶高氏(大阪大学・生体統御ネットワーク医学教育プログラム修了・現IMS Japan)をパネリストに迎え、大学院生、大学教職員を含む約80名の参加者とともに、LP履修生が「新しいタイプのキャリア」を切り拓くためのヒントを探った。

昨今、大学院重点化による博士学位取得者の増加や、産業界における多様性及びイノベーションのニーズ拡大にともない、博士学位取得者の取りうる進路は多様化しつつある。既存のルールに縛られず独自のキャリアを開拓しようとするLP履修生には、このような時代の流れが追い風となる一方で、前例のない世界に飛び込むことに対する不安や葛藤もつきまとう。同企画中、「LP履修時にはどのようなことを意識して行動すべきか」「各LPにおけるリソースの効果的な活用法はどのようなものか」「進路に悩んだ際の判断材料、決断方法は何か」など、現役のLP履修生が抱える悩みや疑問がぶつけられ、試



モデレーターとパネリスト 左:近藤氏、中上段:武居氏、右:上段:白石氏、中下段:乾氏、右下段:金光氏

行錯誤の末に自分の道を見つけたLP修了生のリアルな回答を聞くことができた。

パネリストディスカッションは2部構成にて行われた。第1部は、「パネリストの進路形成・ストーリー紹介」と銘打って、各LP修了生が、自らのキャリア選択や、LP履修時の葛藤や模索、試行錯誤についてざくばらんに語った。「各LPの履修科目を通じて自分のキャリア観が明確になった」「進路選択において重要な影響を与える恩師との出会いがあった」などLPを効果的に活用することが出来た例が挙げられた。一方で、「既に社会に出ている同期と比較すると焦燥感があった」「研究・専門性をどのように位置づけるか非常に悩んだ」というLP履修生独自の悩みや、「就職した現在においても、博士号取得者としての専門性や知見の明確な効果がまだ見られていない」「周囲は多くが文系の学部出身者で自然科学系の博士号取得者はほとんどいない」などLPを修了した今でも苦勞しながら道を切り開いている状況が紹介された。モデレーターとの対談を通じ、一見「順風満帆な成功者」



に見えるパネリストが、LP履修時、そして今現在においてもLP先駆者としての悩みを持ちながら奮闘している姿が浮き彫りとなった。博士学位取得者のキャリア形成には「正規のルート」が存在しないことが改めて強調された。修了生からは「怒られるまでやってみよう」というメッセージから、前例がないことに臆せず挑戦することが重要であると勇気づけられたほか、「与えられた機会」を「将来につながる機会」として認識するアンテナをもつことが必要であるとのアドバイスなどもあった。

第2部は「全体討論」として、1)多様なキャリアを考える際に「博士学位」や「専門性」をどのように位置づけるか、2)バイタリティある人材を育成するために「LPができることは何か」という視点から活発な議論が展開された。両議題に対してパネリストから、「ある分野において課題を設定し、その解決に向けてアクションを取り、結果について評価をする。博士号の取得というのは、その一連のプロセスが出来る人に与えられるものであると考える」「LP履修にあたり自身の目的意識を明確化し、LPを効果的

に活用することが重要である」といった持論が展開された。その後、会場の参加者を交えて議論を深化させた。LP修了生からは、海外の人類学者が、「自分は人に寄り添うプロ/専門家である」と表現したことに刺激を受けたというエピソードが紹介された。「専門性」や「能力」を自分の言葉で定義し、異なる分野においても自らの強みを見だし、発揮できるようになることの重要性が強調された。また、専門分野で培う分析力に加え、LP履修によって得られる俯瞰力や先見性といった総合的な力の育成が重要であるとされた。

今回の企画は、修了生の声に刺激され、全国のLP履修生に「新しいタイプのキャリア形成」について考える機会を提供することができた。また、学びの主体である学生の視点から大学院教育を再考することの重要性が焦点化され、盛況のうちに幕を閉じた。なお、登壇者のプロフィールと当日の様子を撮影した動画は企画ウェブサイト(<https://leadingforum2017-student.localinfo.jp>)上で公開している。

^{注1} 「博士課程教育リーディングプログラム(LP)」は、優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたるグローバルに活躍するリーダーへと導くため、国内外の第一級の教員・学生を結集し、産・学・官の参画を得つつ、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した世界に通用する質の保証された学位プログラムを構築・展開する大学院教育の抜本的改革を支援し、最高学府に相応しい大学院の形成を推進する事業(引用:日本学術振興会HP)。そして「博士課程教育リーディングプログラムフォーラム」は全国30大学で実施されている62LPの教職員・学生関係者に加え、産業界、研究機関、行政機関、国際機関、アカデミアからの幅広い参加者とともに、LPの現状、将来とその展望について議論するプラットフォームとして位置づけられる。

^{注2} 「名古屋大学・PhDプロフェッショナル登龍門」はフロンティア・アジアの地平に立つリーダーの養成を目的とした名古屋大学のオールラウンド型LP。なお、同企画に有志として集まった学生は以下のとおり。近藤菜月、加藤紫帆、鈴木健介、藤井亮輔、吉田圭介、Yuan CAO(以上一期生)、田中俊行、Kumar Arun SHARMA(以上四期生)